

踏む。大徳慈を垂れ、見苦を離れしむ。故に汝の恩を忘れず、今宵報ゆる
くのみ」といふ。時に其の母と長子と、諸の靈を拜まむが為に其の屋の内に
り、万侶を見て驚き異りて其の出来る所以を問ふ。万侶是に具に前の事を説く。
母長子を罵りて曰はく「呼矣、我が愛子は汝に殺さる。他の賊にあらざるな
り」といふ。すなはち万侶を礼みて、更に飲食を設く。万侶還来りて快を以ち
て酬に白す。夫れ死靈白骨すらなほし此くの如し。何にいはず、生ける人
にしてあに恩を忘れむや。

縁 第十三

女人風声なる行を好み仙草を食ひて現の身に天に飛ぶ

大倭国宇夫郡漆部里に、風流なる女有り。是れすなはち彼の部内の漆部
造麿の妾なり。天年風声を行とす。自づから悟りて塩麿を心に存む。七の
子を産生み、極めて窮しく食無し。子を養ふに便無し。衣無く藤を綴り、日
々に沐浴みて身を潔め穢を著る。毎に野に臨むときは草を採ることを事とす。
常に家に住るときは家を淨むることを心とす。菜を採り調へ盛り、子を唱ひ

第十二縁 あやしき妻(じ)の説話。善業につ
いての現報説話。全書物語集・十九・三十一
にて書來。杖案曉記・二二年条に引用。
六底本訓釈(履不方(留か))。元底本訓
釈(履不方(留か))。二(二合)、
比止加之良。下巻二十七縁。三高何麗の
僧か。事紀白蓮元年条にも「道登が高麗の
故事を引いて并じている記事がある。本書では、
三(六化元(念))、十師に任せられる。白蓮元
年(念)。白蓮が結婚であることを併じている。
宇治橋斷碑に世有釈子、名曰道登、出自
山尻、東瀛之家。大化二年、丙午壬辰、權立
此橋、濟度入者」とみえる。三本元興寺。
三「道濟」は僧名であらう。三六四六年。
三宇治川にかか。橋の意に用いる。橋は、
「僧」に由来する文字(漢注倭名類聚抄)。三底
本訓釈(源作也)。三(三奈良市と京都府との境
の丘陵。大和から山城への経路。三底本訓釈
「浪佐波爾」。元宇治橋斷碑に「濟度入者」
とある。原文為人者所履。底本訓釈「高介毛
乃爾」。これより推して、「弁所」の坡動は
「に」るらる」と訓んでおく。三「高嶺地」
ならざる所に葬られた死屍が、生者に移葬を求
め、「高嶺地」に葬られた安業を得た、という説
話(風流七・中仲地、搜神記・十六・文類、広記、
三二二・長無忌、太平御覽・七八所引幽明録、
尋陽參軍などの系譜につらなる。下巻二十
七縁。三十二月の晦の夜には死者の魂がこの
世に帰つて來る、とされた和泉式部統真・三、
曾丹眞(六、徒然草十九。底本訓釈(每川文
己利)。三底本訓釈(阿己乃己呂(云隠写
本文にものとづく。三今夜でないならば思かえ
しをする方法が無い。三底本訓釈(裏内也)。

端坐して咲を含み馴へて言はく「敬を致して食」といふ。常に是の行を以
ちて身心の業とす。彼の氣調恰も天上の客の如し。是れ難破長柄曹前宮の
時の甲寅年に、其の風流なる事に神仙感応し、春の野に菜を採り仙草を食
ひて天に飛ぶ。誠に知る、仏の法を修はずして風流を好まばは仙蕪感応する
ことを。精進女問經に云ふが如し「俗家に居住るとも心を端しくして庭を掃か
ば五の功德を得」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

積義覺は、本百濟の人なり。其の國の破るる時に、後岡本宮に宇御めた
まひし天皇の代に當りて、我が聖朝に入りて難破の百濟寺に住む。法師の身
の長七尺、広く仏の教を学びて心波羅を念佛む。時に同じき寺の僧養義とい
ふひと有り。独後半に出で行く。囚りて室の中を見れば光明照り耀く。僧すな
はち怪び、竊に襖の紙を穿ちて法師を窺看れば、端坐して經を誦み、光口より
出づ。僧驚怖り、明日に悔過して周く大衆に告ぐ。時に宣法師弟子に語りて言

十四

僧心經を憶持ちて現報を得奇しき事を示す縁 第一

第十三縁 「仏教を知らない人であつても、
そのおこないが仏教にかなへばおのずと善果
を得る。「みぎ」をなすおこなひは仏教にかな
うものである、と示される。全書物語集・二
十四に書來。
四国会圖書館本訓釈「風(声三左平)、底本訓釈
「風流(二合、美佐乎)、「氣調(三佐乎)。本説話
では「みぎ」の表記を「風(風流)、「氣調」と變
化させている。「風(風流)、「氣調」は、態度、
心の状態、を意味すべき態度、す
ぐれた心の状態、をいう。「行」とされてい
る。だから、かなり具体的な限定されたものをさし
てている。本説話では、日々沐浴し、潔い身(淨
衣)をさす。菜食が通へられるのも、穢れを去つ
た生活態度とどらえてのこと。下文の精進女問

一諸靈を拜する時、後夜は、上巻三縁で童子と
鬼とが争つた時である。二とらす。三中巻十
三縁は聖人(念)忘愚歌とし、イメリジの結び
つきをみせている。
第十三縁 「仏教を知らない人であつても、
そのおこないが仏教にかなへばおのずと善果
を得る。「みぎ」をなすおこなひは仏教にかな
うものである、と示される。全書物語集・二
十四に書來。
四国会圖書館本訓釈「風(声三左平)、底本訓釈
「風流(二合、美佐乎)、「氣調(三佐乎)。本説話
では「みぎ」の表記を「風(風流)、「氣調」と變
化させている。「風(風流)、「氣調」は、態度、
心の状態、を意味すべき態度、す
ぐれた心の状態、をいう。「行」とされてい
る。だから、かなり具体的な限定されたものをさし
ている。本説話では、日々沐浴し、潔い身(淨
衣)をさす。菜食が通へられるのも、穢れを去つ
た生活態度とどらえてのこと。下文の精進女問